

# 『夜の寢覚』論 — 「生霊事件」から辿る男君の役割 —

安 武 佑 梨

はじめに

『夜の寢覚』では、巻四において、「生霊事件」が描かれる。この事件は、男君<sup>1</sup>の正妻女一宮が病で伏せついている際に、中の君を騙る生霊が現れるというものである。この事件について、野口元大氏は、

生霊事件が起こったとき、ヒロイン（＝中の君）<sup>2</sup>の精神は、ぎりぎりの極限状態にまで緊張を強いられていた。現実生活の中に設けられている様々な陥穽を慎重に回避しながら、彼女は自分の信条を守り抜く。そのためには自分勝手な欲求のままに行動したが、男君をうまく操縦しなければならぬのだが、それを女の手管とする自意識から来る自己嫌悪に悩み、男君の背後に常に女一宮の存在を意識しながら、男君に対する

愛を括弧に入れる形で封じ込めることで、かろうじて精神の均衡を保っていたヒロインである。

と、中の君の心理を子細に分析し、「生霊事件」と中の君の関係を論じておられる<sup>3</sup>。また、西里美氏は、「この事件を契機に、（中の君は）改めて自分の処世の態度を振り返り、後世への絶望に苛まれることになる」と述べ、「生霊事件」を、中の君の心に影響を与える事件として捉えておられる<sup>4</sup>。このように、「生霊事件」に関する先行研究では、中の君への心理的影響について論じられることが多い。

そもそも、『夜の寢覚』は、『無名草子』にも「はじめよりただ人ひとり（＝中の君）のことにて、散る心もなくしめじめとあはれに、心入りて作り出でけむ」（六三頁）<sup>5</sup>と触れられる通り、中の君に焦点を当てた物語であるとき

れてきた。

また、永井和子氏は、『夜の寢覚』が女性を中心人物としたことで、「次第に変化し、成長する物語から（男君は）とり残され」、「男性をほうりだした形」で物語が展開されていると述べておられる。このように、『夜の寢覚』の研究は、中の君に焦点を絞ったものが多く、男君についての研究は多くないことが現状である。男君は、中の君の恋人であり、この物語にとつて欠くことのできない人物であろう。果たして、男君は、物語から「とり残され」た人物なのだろうか。

そこで、本稿では、巻四における最大の事件、「生霊事件」に注目し、男君の観点から考察したとき、男君がどのような役割を持つのか考えていきたい。

## 一 中の君と「生霊事件」

まず、「生霊事件」について確認しておきたい。次にその場面を引く。

### 1 北殿（＝中の君）の御生霊、恐ろしげなる名のりする

もの出で来て、「あはれ、今はかくてあるべきものと思ひ頼むに、あながちに忍びつつ、わざと出て来た

まはぬが、妬う、かしこき筋といひながら、内の御事の、あさましうちすさびて、行くての事にて、またともおぼし出でさせたまはぬ恥がましさを、『この御もてなしたに、わざとがましくは、もて隠し、それに思ひ消ちてむ』と思ひしに、いとあさましう、心憂きに、あくがれにし魂の来たるなり。さらに生けたてまつりたるまじ」など、言ひののしることを聞きたまふに：。

（巻四・四〇六頁）。

「はじめに」で述べたとおり、「生霊事件」は、男君の正妻女一宮が病で伏せている際に、傍線部のごとく、中の君を騙る生霊が現れるという事件である。「生霊事件」が起こつた時点、中の君のもとにその情報は届いていなかった。しかし、生霊の噂が広がったことで、それが中の君の知る所となった。「心憂きに、あくがれにし魂の来たるなり」と、男君を慕う中の君の隠された心が嫉妬に狂い、魂があくがれて女一宮に取り憑いたという。この噂を聞いた中の君は、多大な衝撃を受け、原因を探るため、自己の内面に向き合わざるを得なくなった。次は、中の君の心中描写である。

2 げに、（男君の）人がらの、なべてならず目やすきと

ばかり見知りしに、こよなうさだ過ぎたまへりし、世のつねの人さまに、ひきうつされ、我が身をば恥かしう、かなしう思ひ入りしほどに、憂きを知り始めしばかりにこそ、をりをり堪へぬあはれを見知り顔なりしかど、今となりては、うちとけ頼みきこゆべきものとは思ひだに寄らぬことにて、まことに、いみじうつらからむ節にも、身をこそ恨みめ、人をつらしと思ひあくがるる魂は、心のほかの心といふとも、あべい事にもあらぬものを。(巻四・四一―四二二頁)

中の君は、故関白との結婚において、自分が男君を慕う事実を認めたと、彼が女一宮と結婚してからは、男君との距離を安全に保つべく行動していた、と過去を振り返る。その中で、傍線部「心のほかの心といふとも、あべい事にもあらぬものを」と、生霊の噂を否定する。しかし、自分の意志に反した故関白との結婚、帝軟禁事件を経て、男君への愛を自覚した事実と、女一宮に対する嫉妬心の自覚に、中の君は、生霊を否定できないでいた。次の本文である。

3 いで、あな心憂の心や。この月ごろ、我ながらも、かならずつらき節多く、便なきことも出で来なむものをと、思ひ離れ、飽き果て、籠り居なむと思ひ寄りしも

のを。(中略) かかる事を聞くが、我ながら、思ひとるかた強からず、口惜しう、ものはかなき心の怠りなり。 (巻四・四一三頁)

中の君は、自己を分析し、前半の傍線部「いで、あな心憂の心や」と、自身の心持ちを情けなく感じる。そして、後半の傍線部のごとく、「思ひとるかた強からず」、つまり意志が弱く、頼りない「心の怠り」によって、生霊の噂が出てしまったのだと考えるのである。中の君は、更に過去を振り返り、

4 この人のほのめいたまふたびごとに、乱るる心、今や今やあくがれ寄るらむとこそ、我ながらゆゆしけれど、さはれ、見え果つべき身かは…。 (巻四・四二三頁)

と思う。傍線部から、中の君は、自身の心が女一宮に「あくがれ寄る」ことを忌まわしく考えており、生霊の噂を否定しきれずにいることが窺えよう。

中の君は、以前より、「さすがに度ごとに、いみじう心の乱るこそは、かの十五夜の夢に、天つ乙女の教へしさまの、かなふなりけれ」(巻四・四一三頁)と思っていたこともあり、次第に出家への意志を固めてしまう。男君のそ

ばにいては出家などできないため、「(女一宮の)御心地の  
かからむほど、西山に参りてあらばや」(巻四・四二九頁)と、  
父のいる広沢への移動を決める。広沢にて父と対面した中  
の君は、「髪のまますこし短くならむばかりのやつれより  
ほかは、今は何事の口惜しかるべきにもはべらず」(巻五・  
四六〇頁)と言葉を尽くし、父入道より出家の許可を得る  
こととなったのだ。

このように、「生霊事件」によつて、「自分の処世の態度  
を振り返り、後世への絶望に苛まれ」、「ぎりぎりの極限状  
態にまで緊張を強いられていた」中の君は、出家への道を  
切り開いた。「生霊事件」は、中の君に、精神的打撃を与え、  
自己の内面と向き合わせ、出家の意志を固めさせたのであ  
る。

さて、出家を決めた中の君だが、その思いを強めた存在  
があった。それが、男君である。「生霊事件」の悪辣な噂の中、  
男君への愛を自覚した中の君は、その噂によつて男君から  
軽蔑されることを極度に恐れている。以下、その場面を引  
く。

5 げに、大臣も、さしあたりたる御心地を見たてまつり、  
扱ひたまふらむ御心づくしは、つきづきしう名のり言  
ふらむを、(男君は)「げに、さりげなくて、さもやあ

らむな。うとまし」とも、聞き思ひたまふらむかし…。  
(巻四・四二二頁)

6 ただ、まづ知る涙のこぼれぬるを、「かかる事聞きた  
らむとしも知りたまはで、『げに、これ恨むる気色な  
らむ』と、心得たまふらむかし」と思ふも、一筋なら  
ずわりなければ、あながちに、知らぬ顔にもて紛らは  
して…。  
(巻四・四一六頁)

7 さればよ。一夜も、さばかりあらはれ出でてののしる  
気色を、「さこそありしか」と、あらぬこととおぼさは、  
のたまはざらまじやは。深くまこととおぼすなめり。  
いかでかは、さりとして、名残なくひききりなる御心づ  
かひのあらむ。なかなか、さりげなくておぼすらむこ  
そ、いみじう恥かしう、心憂けれ。(巻四・四二二頁)

5は、生霊の噂を聞いた際の、中の君の心中描写、67は、  
生霊の噂が立った後に男君と対面した際の、中の君の描写  
である。それぞれの傍線部をみると、中の君は、男君の意  
向を何度も気にし、男君が自身を軽蔑していると推察して  
いることが窺える。ここで次の本文を見ていただきたい。

8 (生霊の)言ひののしることを聞きたまふに、殿は、

よろづさめたまひて、「いとあさましう。言ふこととて、まねびもてはやすことの中に、つゆのまことはなきかな」と、をかしうも見聞きたまふに、「漏り聞きたまひて、いとど、いかにおぼさむ」など、うちおぼすにも、胸ふたがり、涙落ちて…。

(巻四・四〇六頁)

生霊が現れた際の、男君の様子である。傍線部「つゆのまことはなきかな」とあるように、男君は、生霊が中の君であることを信じることなく、その状況を「いとあさまし」とさえ感じている。しかし、中の君は、567で見たとおり、男君が自分を生霊になつたと信じ、軽蔑していると誤解していた。誤解したままの中の君は、それゆえ男君から離れる決断を下すに至つたのである。

9 憂きをもつらきをも尽きせず思ひ知り、うとましげなる名をさへ流し添へ、つねに世にもありつかず、浮き

漂ひてのみ過すを思ふに、いみじく口惜しく、まして後の世いかばかり暗きより暗きに入らむ道のたどりも堪へがたからむ。心地もいと苦しくのみあるは、命もながらふまじげなめるを、このついでに、やがて世を背きなばや。

(巻五・四五六頁)

中の君は、「生霊事件」の後、「心地もいと苦し」と、病に伏したこともあり、出家の意志を固めてしまつた。男君への愛を自覚した中の君にとって、男君から非難され軽蔑されるのがどれほどの苦痛かは想像に難くない。中の君は、「生霊事件」によって、床に臥し、出家を決意するほどまでに、精神的打撃を受けたのであろう。

さて、中の君と「生霊事件」について改めて確認したが、このような中の君と「生霊事件」について、永井氏も、中の君が事件をきっかけに自身の心のうちを知り、出家を望むようになることを指摘しておられるとおり、この事件によって中の君が自己の内面に向き合い、出家を望むに至つたという推察は、もはや動かないだろう。「生霊事件」は、中の君にとって、いわば負の要素となる事件なのである。

## 二 男君と「生霊事件」

では、男君にとって、「生霊事件」はどのようなものだろうか。まず、中の君に対する男君の心情について確認したい。

中の君は、「生霊事件」によって男君に軽蔑されたと誤

解していたが、男君は中の君を軽蔑しておらず、むしろ、生霊が中の君であることを否定していたことは、前節で確認したとおりである。ここではまず、生霊に対する男君の様子<sup>A</sup>が記されるAを引用する。

A (生霊の言葉を) 聞き居たまへる殿の御心地、いといみじうむつかしう、心憂し。「我を恨むるなどの気色にはあらで、いつよりもいみじう思ひ入りたりつる気色には、この事の聞えけるにやあらむ。さらば、深くも世を憂しと、思ひ飽きなむかし」と思ふに、慰めどころなく、ことわりなるを、かなしくおぼしつづけて、つゆもまどろまれず。(巻四・四二二頁)

傍線部「深くも世を憂しと、思ひ飽きなむかし」とあることから、男君は、中の君が生霊の噂によつて出家を望むのではないかと危惧していることが分かる。つまり、男君の心中を誤解していた中の君に対し、男君は中の君の心中を正確に把握していたと言えよう。

さて、前節において、私は、中の君が「生霊事件」を通して出家の意志を固めた、と述べた。そのような中の君に対し、男君は、出家を止めようと精神的に動く。広沢へ移った中の君を追い、次のBのごとく言葉をかけ、誠意を尽く

して中の君を説得するのである。

B 昔より今宵までの心のうち、まねびやるべくもあらざ言ひつづけたまひて、「心づくしにつらき御契りながらも、さすがにえさらぬ絆あまたにこもかしこも身に添へつつ、避くべくもあらぬあはれなどを、今さりとも、いかばかりの、まじりおぼし捨て変る御心あらむと、うちたゆまれつるに、あさましく。…」(巻五・四七四頁)

男君は、二人の契りの深さや子供らの話を出す、中の君の出家を望む意志は変わらない。そこで、男君は、父入道に二人の関係を打ち明けるといふ方法を探る。男君の告白を聞いた父入道の言葉が、次のCである。

C 「あはれ、かかりけることどもを、夢の中にも我が知らで、心をやりて故大臣(＝老閼白)に許し放ちしほど、男も女もいかばかりおぼされけむ。(中略)かく知りはべらましかば、いみじくまことにとちめつる命と見はべるとも、いかでかさは思ひ寄り、はべらむ。…」と、言ひもやらず、押し拭ひつつおぼいたる気色、いみじくあはれなり。(巻五・四八二～四八七頁)

「前半傍線部」かかりけることども」「後半傍線部」かくは、男君と中の君が深い関係にあったことを指す。前節9で確認したが、生霊事件を経て広沢に滞在する中の君は、病を得たこともあり、父入道に出家の許可を取り付けることができた。男君と中の君が、ただならぬ縁を持ち、愛し合っていたという事実は、C波線部のごとく、娘の出家を許可した入道に、それを後悔させたのである。その結果、出家の許可は取り下げられることとなった。また、次のDを御覧いただきたい。

D (男君が) 片時も立ち離れず、よろづに泣く泣く慰めつつ、ひとへにまつはれたるやうにて見たてまつりたまへば、四月ばかりになりたまひにたる御乳の気色なご、紛るべくもあらぬさまなるを、「この御心はかくにこそありけれ」と、あさましく見おどろきたまひて……。(巻五・四九九頁)

広沢で中の君と再会した男君は、体調の悪い中の君のそばを離れることがなかった。その際、傍線部「御乳の気色」が「紛るべくもあらぬさま」に変わっていたことから、中の君の妊娠を発見したのである。男君は、中の君の懐妊に

喜び、

E 御しつらひ、御調度、女房の局々まで、昔にはたちまざるかなとおぼゆばかり、忍びておほしいとなむほど、九月はた過ぎせたまふべければ……。 (巻五・五三三頁)

と、自邸に中の君の室を準備し、公に中の君を妻として迎えようとする。このような男君の行動は、中の君を、出家の道から更に遠ざけてしまうものであった。結局、中の君は出家を諦め、男君と帰京することになったのである。男君は、中の君を愛しながらも、自身の妻の妹であったこと、あるいは老閨白の妻となってしまうことから、彼女を公の妻として扱うことはできなかった。しかし、「生霊事件」を経て、ようやく中の君を自邸へと迎えることができたのである。

このように、男君は、中の君の出家を阻止し、更には自邸へと連れ帰ることに成功した。中の君に焦がれ続けた男君にとって、我が子を宿した愛する女を妻として迎えることは、この上ない喜びだったはずだ。言うなれば、「生霊事件」によって中の君が出家を決意したことは、男君が中の君とともに帰京する一助になってしまったわけである。つまり、「生霊事件」は、男君が望む結末に向かう契機となっ

た事件と捉えられよう。中の君にとって負の要素であった事件が、男君側から見るとき、男君にとってより望ましい結果を導く事件となっているのである。

### 三 中の君と男君の乖離

さて、これまで、「生霊事件」が、中の君にとっては負の要素となる事件であり、男君にとつては自身の望む結末を導く事件であることを確認してきた。男君の行動により、出家を断念し、男君邸に引き取られた中の君であるが、ここで中の君の考えに注目したい。一見すると、「生霊事件」において、男君を信じられず出家を決意した中の君にとつて、あるいは、姉の夫であった男と縁を結んでしまい、男君の公の妻として世に出られなかった中の君にとつて、表立って男君の邸に迎え入れられることは、男君の愛を感じられる出来事であろう。中の君が幸せを掴んだようにも見える。しかし、中の君の心は、出家を決意したことによつて、男君から離れていたのである。そのことは、次の本文からも確認できる。①は、出家の許可が取り下げられ、男君と帰京することになった中の君の心情である。

① かばかりあまた繁き御仲の契り、今はと安らかにうち

とけらるる心もなく（中略）「ほのかなりしを、かけ離れ思ひ出でしこそ、人より殊なりと、心をとめてあはれも深かりしか、なかなか、かかるにつけても、もしながらふる命もあらば、恨めしき節多く、心劣りしたまふべき人ぞかし」と思ふに、「亡き昔のみ恋しく…。

（巻五・五二頁）

前半傍線部「今はと安らかにうちとけらるる心もなく」と、この時点、中の君は男君に心を許すことなく、後半傍線部「亡き昔のみ恋しく」つまり、元夫の老閨白を恋しく思っている。そのような中の君にとつて、男君の、中の君を自邸へと迎え入れるという行動は、余計なものでしかなく、かっただろう。しかし、男君にとつては、中の君を表立って自邸に迎え入れ、愛を育むという、自身にとつて望ましい結末に向かう行動であったと言えるのである。

先にも述べたが、「生霊事件」を中の君と男君それぞれの観点で見るとき、二人に与えられた影響は異なるものだった。では、同じ事件であるにもかかわらず、その受け止め方に差が見られることから、どのようなことが分かるのだろうか。

まず、中の君の誤解に注目したい。「生霊事件」の噂が広まったとき、中の君は、男君が噂を信じていると誤解す

る。それにより、中の君の心は男君から離れ、出家を決意してしまふ。一方、男君は、中の君が生霊であることを否定していた。中の君が出家を決意したのに対し、男君は中の君の出家を止め、自邸に迎えようとしている。このように、二人の考えには、齟齬が生じていたことが窺えるのである。

ここで、男君の正妻女一宮について見ておきたい。「生霊事件」において重要となる人物が、女一宮である。女一宮は、先帝の娘で今上帝の妹という立場にあり、男君に降嫁した。そのような女性であり、生霊に取り憑かれた女一宮は、「生霊事件」と切り離せない存在なのである。更に、妻という立場においても、中の君の比較対象となり得る人物だろう。このような女一宮に関する研究も幾つか見られる。

例えば、赤迫照子氏は、女一宮の降嫁の背景を分析し、「「高き」という語に注目した上で、物語における女一宮の意義を詳細に論じておられる」<sup>10</sup>。宮下雅恵氏は、「「生霊事件」における「病」と「身体」の視点から、中の君と女一宮を比較された」<sup>11</sup>。しかし、どちらも中の君と女一宮との関係についての言及はあるが、男君と女一宮との関係については述べておられない。

また、次の本文を御覧いただきたい。

② 宮（＝女一宮）におはして、見たてまつりたまへば、

つねの御苦しげさにて、まだいと心苦しげに見たてまつるも、またいとほしく胸ふたがりつつ、御かたはらに添ひ臥したまひて、「いかなれば、かくのみ心をば尽させたまふぞ。心憂く」と、御手をとらへて、御顔に涙を落しかけたまひても、（中の君の）いといたう思ひ乱れたまひつる人の気色、琴の音、ひとりごたれつる言など、耳につき、面影に見え、「世に苦しがるべきことは、二方に心分くるに増すことこそなかりけれ。（大君と女一宮の）いづれも、いと深くはあらず、なのめなるを、めやすくもてなすこそ心の中はやすらかなりしか。」」（巻四・四一九頁）

これは、病に伏した女一宮を見舞った際の、男君の心中描写である。傍線部のごとく、男君は、女一宮と中の君、二人の女性を愛したことに心を乱している。このことについて、高橋由記氏は「生霊事件の発端となった女一宮の病を境に、男君の意識の中で女一宮が大きく変わっていることも読みとることができる。女一宮は病を得て後、男君にとつての愛情の対象としても描かれるようになった。」と述べておられる<sup>12</sup>。しかし、

③ 「なごてこの人(中の君)に、人を並べては見るべきぞ」とのみ、こまかにうちとけ見るままに、心にもしみまさりて、ほろほろとうち泣かれて、「さも、よろづにおぼし放つ言葉のみ尽させぬかな」と、恨みも契りも立ち離るべきかたなく言ひ尽して、からうじて宮(女一宮)の御方に渡りたまへる。

(卷五・五二八頁)

傍線部「なごてこの人に、人を並べては見るべきぞ」とあるように、男君の、中の君への愛情は、他の追従を許さなほほど深い。男君にとつて女一宮は、中の君が老閑白の妻となつた辛さを紛らわせるために縁を持つた女性である。また、今上帝の妹であることから、多大な権力を背後に持つ女性でもある。無論、そのような妻を蔑ろにはできない。だからこそ、傍線部のごとく、「からうじて」女一宮のもとへ通つているのである。そのため、男君は、

④ 我が心にも、片時の隔てもいみじう苦しかるべきままた、よろづを語らひ尽いて、「いでや、など、慰むこともやと(女一宮に)思ひ寄りしならむ。今は、また分くかたなく思ふさまにてあらましものを。…」

と、傍線部のごとく、女一宮に「思ひ寄」つたことを後悔し、中の君のみに心を砕けない状況に苦しむのである。更に、男君は女一宮と対面している際、次の⑤のように思う。

⑤ なほなほしく言に出でてのたまはぬ御心ばへ、気色は、いみじく思ふさまに、うれしくめでたく、なかなかかがるにしもいとほしく、かたじけなきことまざるやうにおぼえたまふものから、重りかにあてなるかたも過ぎて、あまりいとうるはしく、我が怠り言ひどころなくおほしますにぞ、我も言少なになりて、(中の君の)いとおほどかに、尽きせずあえかにはもてなしながら、さべき節々聞き過ぎず、憂きもあはれなるも、かならず聞きとどめ思ひ知るなめりかしと見えて、うらもなく心うつくしげにうちかすめたまふ有様の、らうたげににほひ多かるは、「今も見てしが」とのみ思ひやられたまふを、さりげもなく様よくもてないて、その夜も明けぬ。

(卷五・五三二頁)

点線部、男君が女一宮に対し評価をしている。「いとほし」や「いとうるはし」ともあり、男君が女一宮を素晴らしい

女性だと考えていることが窺える。ところが、波線部以降、男君の意識は、中の君へと向く。女一宮と対面しているにもかかわらず、である。言い方を変えるならば、男君は、女一宮と比較することにより、中の君の良さを痛感し、中の君を「『今も見えてしが』とのみ」思うのである。つまり、女一宮の存在は、男君の中の君に対する愛情がより強調されるためのものだと言えないか。

このように、男君の中の君への愛情は増していくばかりである。しかし、中の君は、「生霊事件」後、①のごとく、男君から心が離れていた。ここで、次の本文を御覧いただきたい。⑥は、帝と中の君の關係に嫉妬する男君に対する、中の君の心中描写である。

⑥ 「かくて（＝男君の妻として）あるも、あるとおほえず。幼き人々の数々見捨てがたく、これかれの御扱ひを、我さへ知らずなりなば、いかがはと思ふばかりに、ながらふるにこそあれ。まことは、世のつねにとまる心のなきも、心やすきわざなりけり。この世にしむ心のあらましかば、恨めしき節なくはあるまじき」などおほすに、「この世は、さはれや。かばかりにて、飽かぬこと多かる契りにて、やみもしぬべし。後の世をだに、いかでと思ふを、さすがにすがすがしく思ひ

立つべくもあらぬ絆がちになりまさること、心憂けれ」と、夜の寢覚絶ゆるよなくとぞ。（巻五・五六九頁）

これは、現存部最後の場面でもある。⑥以前、中の君は、男君と子を多く儲けたからこそ、男君との關係を続け、帝には何の思いも持っていないのだと考える。しかし、男君の執着やどうにもならない定めに、中の君は、前半傍線部「かくてあるも、あるとおほえず」、つまり、男君の妻となり生きていることは、本当の生き方ではない、と考えるのである。生きながらえているのは、ひとえに、子のためなのだという。そのため、後半傍線部「この世は、さはれや」と感じ、「飽かぬこと多かる契りにて、やみもしぬべし」と、考えるのである。つまり、中の君は、自身の生を諦め、最後まで世を厭うままだったのだ。

男君が、中の君を公の妻として迎え、子供とともに暮らすという望みを叶えたのに対し、中の君は、最後まで、出家の望みを叶えることはできなかった。男君と中の君は、片や自身の望む、片や自身の望まない結末をと、志向が噛み合わないままの結果を迎えたのであり、二人の結末には乖離が見られるのである。

また、③④⑤において、女一宮がいることで、男君の、中の君への愛情が強調されることを確認した。男君から中

の君に対する愛情の深さと、中の君から男君に対する愛情の深さの差違は、女一宮の存在によつて、より強調される。二人の、いわば、互いに対する温度差が拡大しているのだ。つまり、男君の中の君に対する愛情が強ければ強いほど、男君から心が離れ世を厭う中の君の心情が浮き彫りになり、中の君と男君の心の乖離は強調されていくと言えるのである。

このように、中の君と男君は、前世からの深い縁を持つにもかかわらず、互いの心がすれ違い続け、真に結ばれることがなかった。男君が中の君を望めば望むほど、中の君の心は男君から離れてしまうのである。これは、『夜の寢覚』における「悲劇」の一要素だと捉えられよう。そして、この中の君と男君の心の乖離は、「生霊事件」を、中の君側のみならず、男君側から考察したことによつて確認されるのであった。

## おわりに

『夜の寢覚』巻四に見られる「生霊事件」は、中の君との関わりが多く論じられる。「生霊事件」は、中の君に精神的打撃を与え、自己の内面に向き合わせ、出家の意志を固める要因となった。中の君にとつて、この事件は負の要

素をもたらすものだったのだ。しかし、男君側から「生霊事件」を見たとき、それは異なる様相を呈した。男君にとつての「生霊事件」は、中の君の出家を阻止し、更には公に自邸へと連れ帰る要因となった、いわば、男君が望む結末に向かうための契機となった事件だったのである。

中の君は出家を望み、男君は中の君を手に入れることを望むという、二人の志向の乖離は、「生霊事件」における認識の差異により発生した。そして、二人の間に見られる様々な齟齬は、中の君が男君邸へと引き取られてからも噛み合うことがなく、中の君は出家を望むままであり、男君は中の君をひたむきに愛するままであった。さらに、女一宮の存在により、男君の中の君に対する愛情は強調され、中の君と意向と男君の心情の乖離もまた、強調された。

中の君と男君は、前世からの深い縁を持つにもかかわらず、互いの心がすれ違い続け、真に結ばれることがない。それは、『夜の寢覚』における「悲劇」の一要素と言えようが、その中の君と男君の心理的乖離は、男君が中の君を追い求めるが故に、強調されるのであり、この物語が男君に与えた役割は、かくも大きなものだったのである。

注

- 1 男君（＝権中納言）は、巻一から巻五にかけて呼称が変化  
する。そのため、本稿においては、以後「男君」と統一し表  
記する。同様に、中の君は「中の君」、姉大君は「大君」、源  
氏太政大臣は「父入道」、と統一し表記する。
  - 2 先行論の文中でも以降の本文の文中でも、（○○）、（＝○○）  
の形で私注を付すことがある。
  - 3 野口元大氏「第三部における人間の認識」（『夜の寢覚研究』、  
笠間書院、一九九〇年）。以降、すべての引用文中の傍線は稿  
者が付したものである。
  - 4 西里美氏「寢覚の女君論―「宿世」への内なる抵抗―」（『国  
文研究』三五号、熊本女子大学、一九八九年十二月）
  - 5 『無名草子』本文の引用及び頁数は『新潮日本古典集成』（新  
潮社）に拠る。
  - 6 永井和子氏「寢覚物語の主人公―その理想性をめぐって―」（『続寢覚物語の研究』、笠間書院、一九九〇年）
  - 7 管見による限り、末沢明子氏「聞く」ことの機能―『夜の  
寢覚』の「声」―」（『中古文学』五九号、一九九七年五月）、  
高橋由記氏「撰関家嫡子の結婚と『夜の寢覚』の男君―但馬  
守三女への対応に関連して―」（『国語国文』京都大学文学部  
国語学国語文学研究室編七三巻九号、二〇〇四年九月）、『夜  
の寢覚』の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」（『流通経済大学創  
立五十周年記念論文集』一号、二〇一六年三月）、安部清哉氏・  
菊池そのみ氏「男が泣く日本文学の系譜を探って―男主人公  
が最も泣く『夜の寢覚』―」（『学習院大学国語国文学会誌』
- 五九号、二〇一六年三月）などがそれに該当するか。
  - 8 『夜の寢覚』本文の引用及び頁数は『日本古典文学全集』（小  
学館）に拠る。底本は島原本。
  - 9 永井和子氏「寢覚物語」（『寢覚物語の研究』、笠間書院、  
一九六八年）
  - 10 赤迫照子氏「『夜の寢覚』女―宮試論―「気高さ」をめぐって」（  
『広島女子大国文』二十号、二〇〇五年八月）
  - 11 宮下雅恵氏「病と孕み、隠蔽と疎外―『夜の寢覚』を手掛か  
りに―」（『日本文学』五〇巻五〇号、二〇〇一年五月）
  - 12 高橋由記氏「『夜の寢覚』の女―の宮―降嫁した内親王  
（一）」（『平安文学の人物と史的世界―随筆・私家集・物語』、  
二〇一九年）